

光 文 社 時 代 小 說 文 庫

平賀源内

長編時代小説 村上元三

上





光文社文庫

長編時代小説
ひらがげんない
平賀源内<上>

著者 村上 元三

1989年10月20日 初版1刷発行

発行者	大坪昌夫
印刷	豊国印刷
製本	榎本製本

発行所 株式会社 光文社
〒112-11 東京都文京区音羽2-12-13
電話 東京 03(942)2241(代表)
振替 東京 6-115347

©Genzō Murakami 1989

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-334-71033-6 Printed in Japan

光文社立庫

江苏工业学院图书馆

長編時代小説

藏中章

平賀源内

村上元三



光 文 社

平
賀
源
内
(上卷)

平賀源内（上巻） 目次

ギヤマン遊女

七

風来居ふうらいきよ

三

長崎だんじり

五

元禄小判げんろく

八

朝鮮人参ちんじん

九

渡り鳥

一三〇

長者番附

一四

大坂算盤おおさか

一六

金運女運

一九二

敗亡

二〇〇

芝居茶屋

二五一

雨の振り袖

二八三

五彩の夢

三二三

熊の皮

三四三

源内勘定

三七二

火鼠の皮

三九八

ギヤマン遊女

だんじり囃子が、廓のざわめきの中をただようようにして、ときどき聞こえてくる。風が変わったせいであろうか。その間を縫って、奉納踊りの囃子らしいものが、ふっと聞こえては、またやんだ。

ひとりで飲んでいるうちに、明日はこの長崎の諏訪祭の踊り奉納という夜、まわりは賑やかなのにその反対に、だんだん風祭藤次郎は気が沈んできた。

頭の中のどこかに、もう一人の藤次郎がいて、しきりに自分をけしかけているように思われってくる。

「殺してしまえよ、千歳を。そしてお前も、旗本の子らしく、腹を切るのだ」
もう一人の藤次郎が、しきりに自分の耳元でささやいている。

「畜生、おれをだましやがって」

藤次郎は、部屋の隅の衣桁にかけてある、千歳の華やかな裃を睨みつけた。

「ぶち斬ってやる」

思わず藤次郎は、大きな声を出した。

「女郎づれの分際で」

ビロード地に、虎を金糸で縫いとったその裃までが、ひどく癢にさわってきて、藤次郎は

膝を上げ、それを引っぱりおろそうとした。

「痛いっ」

脇差の鑢つばが、肋あばらにさわった。

今夜は、この丸山の肥前屋利右衛門ひぜんやりえもんの店へあがるとき、大小を預けるのに、そつと藤次郎は脇差だけ袖に隠し、内ぶところへ入れて、千歳の部屋に通ったのであった。

客の座敷に出ている、といって千歳は、いない。

禿かぶろも部屋から追い出し、藤次郎は、ひとりで酒をのんでいた。

気がついて藤次郎は、内ぶところから脇差を抜き出すと裃かみかきのうしろへ隠した。

「もう、あいつの口には乗せられるものか」

藤次郎は、ひとり言をいった。

父親の威光で、部屋住みの身が、長崎奉行大橋五左衛門おおはしござえもんの組下くみしたとなつて、この土地へ来たのが寛延三年、この宝暦二年で、もう一年の余になる。役目は、役所付というだけで三十俵三人扶持よちだが、月々、藤次郎は、江戸の父から金を送つて貰つていた。

それが、若い藤次郎には毒になり、丸山通いを覚え、もう八方借金だらけになっていた。

ことし藤次郎は、二十二歳になる。

蘭学を学びたい、といって長崎へ出てきただけに、骨も細く、色が白く、剣術などはろくに知らない。

一本気で正直だった藤次郎も、この店の千歳となじんでから、ずいぶんよくない事を覚えた。

「おれを、駄目な人間にしやがって、畜生」

また藤次郎が呟いたとき、廊下を、ぱたんぱたと近づく足音が聞こえた。

千歳に違いない。

桶襦のうしろに隠した脇差のほうへ、ちらりと藤次郎は眼をやった。

今夜の藤次郎は、わざと目立たぬよう、五枚笹の定紋のついた単衣ひとえの着流しであつた。

いそいで坐り直し、藤次郎は、わざと平静をよそおつて酒をのんだ。

今夜は遊女と無理心中をして果てるのか、と思うと、いままで頭のどこからか、さかんに自分をけしかけていたもうひとりの藤次郎は姿を消して、涙なみだが出そうになつてきた。

出島屋敷へ通つて、通詞つうじからオランダ語を学び、また唐人屋敷へも出入りして、通事つうじから言葉ことばを教えられていたのも、もう空に失せてしまふ、と考えると、藤次郎は、ぎりつと齒を噛んだ。

長崎奉行の大橋五左衛門は、藤次郎の父の下役を勤めていたことがあるので、役所でもあまり骨の折れる仕事は藤次郎へ言いつけぬようにしてくれている。

自分としては恵まれた生活をしていたのに、千歳のせいで、と考えると藤次郎は、障子越しに近づく足音のほうを睨みつけた。

すうつと障子があいて、千歳が、ふらつと入ってきた。

酒に酔っている様子はない。

流し目に藤次郎を見て、千歳は、横ずわりに坐つた。

「こわい顔」

千歳の、ややかすれた声に、はじめは色気がある、と藤次郎は思っていたのだが、今はその声を聞いてさえ、身震いの出るほど腹が立つ。

長崎遊女の服装は、ただ金をかけた、というだけではなく、貿易港だけに舶来品が手に入るので、ビロード、金欄緞子^{どんすけ}などを使っているのが多い。

ことに千歳は、出島屋敷や唐人屋敷へも出入りをする遊女なので、長崎では一口に唐物^{からもの}というオランダ物、唐船が運んできた布などを、ぜいたくに衣裳に使っていた。

面長で、眼鼻立ちは派手だし、肉づきのいい身体なのでことに千歳は、オランダ人や唐人には好かれた。

「こわく見えるか、おれの顔が」

藤次郎は、千歳を睨みつけた。

自分の顔が青くなっているのが、藤次郎にも判る。手が震えて、いきなり眼の前の鉢を千歳に打つけたくなった。

「なにを怒っておいでじゃえ、藤さま」

「お前は、もうおれと別れたい、といったそうだな」

「そんなこと」

「隠すな。朋輩の者たちから、おれは、からかわれた」

「みな衆が、藤さまとわたしの仲をねたんで、根も葉もない事をいうているのでござりまし

よう」

「おれはお前のところに、薬種やくしゆや唐物などを運んでやった。それでお前は、ずいぶん金儲けきもちけをした筈はずだな」

「そんなこと、改まって」

「ほほほ、と千歳は、笑い声を立てた。

「なに」

藤次郎は、脇差を隠してある衣桁の桶襦はちまきのうしろのほうへ、ちらつと眼をやった。

いつもとは違う藤次郎の表情から、千歳も、少し不安を感じたようだが、衣桁のうしろに隠してある脇差にまでは気がつかぬ様子であった。

「世間の人は何をいうか判らぬが、わたしが藤さまを思う気持ちに変わりはありませぬ」

といいながら千歳は、盃をとり、自分で酌をしてのみはじめた。

一ぺん疑ってみると、藤次郎は、いままで千歳のいった事、した事、すべてに嘘うそがあり、すっかりだまされていたのだ、という気になった。

「唐人屋敷や出島から、唐物を外へ持ち出すこと固くご法度はつと、とおぬしも承知だろうな」

自分で愚痴だ、とは思いつながら、だんだん怒りがこみ上げてきて、藤次郎の声が震えた。

「それをおれは、いろんな手段で、おぬしに唐物を持ち出させた。それをおぬし、ほかの客に高く売っただけではなく、船大工の何とやら申す奴に、みついでやっていたそうだな」

「阿呆らしい、そんな噂」

千歳は、頭からまともに受けつけていない。

もとは大坂新町の廓くわくの女で、この長崎まで売られてきた、というだけに、客をあしらうすべは、すっかり身につけている。

こんな女に、と思いながら、やはり藤次郎には未練があつた。

「唐物を持ち出させたこと、上役に知れ、おれは今日、きびしく叱りつけられた」
「それは申し訳ござりませぬなあ」

「お奉行どのも、もうおれをかばってはくれぬらしい。八方に借金が出来て、評判を悪くし、このままのめのめと江戸へおれが帰れると思つていいのか」

「藤さま」

盃をおいて、千歳は、開き直つた形になつた。

いままで身体中にただよわせていた色気が、すうつと消えて、ひどくよそよそしい態度になつた。

「わたしは遊女でござんす」

「なにっ」

「そうこわい顔したとて、わたしは何とも思つてはいぬぞえ」

「お前は、おれという人間を、台無しにしてくれた」

「それを一々、お客に怒られていたら、遊女などは勤まりませぬ」

「おれが何どうしたらいいか、お前に判るか」

「さあ、そこまで心配せねばなりませぬかえ」

「お、おれは」

声が上ずり、藤次郎は、身体中が震えた。

「お前を殺して、おれも腹を切る」

「えっ」

藤次郎は膝を上げ、衣桁にかけた裃たてかみのうしろから、脇差をつかみ出した。

さつと千歳は立ち上がった。

「な、何をさらすのや」

千歳は、生地をむき出しにし、壁に背をつけて藤次郎を睨んだ。

脇差の柄つかに手をかけると、藤次郎は、もう物も言えなくなった。じいんと頭の中がしびれていくくせに、夜風を渡ってくるだんじり囃子ばやしが、ふっと聞こえた。

「動くな。お、お前を」

刀を抜き、藤次郎は、鞘さやを捨てた。

本気で藤次郎が自分を殺そうとしている、と千歳にも、はつきり判ったようであった。はじめてその眼に、恐怖がつき上がった。

「お、落ちていて下さんせ、藤さま」

「殺してやる」

ろくに刀の使い方も知らない藤次郎だし、さつきから飲み続けた酒が身体中によどんで、足

も震えている。はじめて人を殺すのだ、と思うと、かあつと頭に血がのぼったり急に背筋が冷たくなったりした。

千歳は、じりじりと障子のほうへ近づいている。声を出そうにも藤次郎の血相が険しいので、その余裕もないらしい。

藤次郎は、脇差を平らに構え、柄頭つがしらに左手を当てた。一気に千歳を突き殺す積もりだった。「おのれ」

震えながら藤次郎が、一足踏み出したとき、千歳は、いきなり足の前にあつた台の物を、勢いよく蹴上げた。ちゃんと自分で、その間と位置を計っておいたものと見える。

皿や鉢がはね上がって、藤次郎の身体に打つかった。

思わず藤次郎がたじろいた隙に、千歳は、

「人殺しいっ」

甲高い声を上げ、障子を押し開けて廊下へ飛び出した。

「誰か来てえ。人殺しいっ」

「待て」

追いつがった藤次郎は、脇差を振りかぶって斬りつけたが、もう眼の前が暗くなったように、刃は鴨居に食い込んだ。

ようやくそれを引き抜き、廊下へ出たころ、千歳は、二間にまくらい先を走っている。

「人殺しいっ」

千歳の悲鳴が、なおのこと藤次郎を狼狽^{ろうばい}させた。

ほうほうの部屋から、客や遊女が廊下へ飛び出してきたが、刀をさげた藤次郎の姿を見ると、悲鳴をあげながら逃げまどった。

「畜生、待て」

藤次郎は、千歳を追いかけたが、千歳は、大段櫓^{だんだん}子を転げ落ちるようにして、駈けおりていった。

それと入れかわって、この肥前屋の店の妓^ぎ夫^{ふう}たちが二、三人、駈け上がってきた。

「風祭様、な、なんばなされますと」

「邪魔だ、どけ」

藤次郎は、刀を振り上げた。

一時は妓夫たちも尻込みしたが、こういうことには慣れている男であろう、ひとりが、壁のほうへ逃げると見せかけて、藤次郎の右から、いきなり手許へ飛びついてきた。

「うぬ」

かわして斬りつける、などということが出来るほど藤次郎は、剣道を学んでいるわけではない。

「なにをする」

刀を振りまわして、対手を追い払ったのが、ようやくのことであった。

そのころになると、肥前屋の二階も階下も、人の叫び声と足音で、騒々しくなってきた。